

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 優秀賞

走る理由

蕪城小学校六年

長岡 ながおか

柚希 ゆずき

「お兄ちゃん。」だれかに呼ばれて俺は振り返った。弟の蒼が手をふりながら走ってくる。そして、横断歩道をわたろうと走ってくる。

「キーツ！」という音が聞こえ、音の方を見ると、トラックが信号を無視し猛スピードでこっちに走ってきた。

「っ！蒼！危ない、早くこっちに！」

そう叫んだのに蒼は、疲れているのか気付いていないのかゆっくり走っている。そこにトラックがきてー。

「蒼っ。」

と叫んで目が覚めた。

「またあの夢か…。」

あれから3ヶ月もたったのに、あの事故は俺の記憶にまるで棘のように突き刺さり、俺を苦しめている。あの事故は、俺のせいではない。でも、もしあの俺がもつとはやく気付いていれば、蒼は巻きこまれなかったのかもしれないのだ。

蒼は今、病院に入院している。昨日病院へいくと、蒼が急にいった。

「あのね、お兄ちゃん。僕ね、もう足が動かないんだって。もうお兄ちゃんとオリンピックで一緒に走ってメダルとれないのかなあ。」え？蒼がいったことは俺には理解できなかった。いや、理解したくなかった。

「だからね、お兄ちゃん。僕にはもうオリンピックに出てメダルをとれないけど、お兄ちゃんは、僕の方もがんばってね。」

うそだろ。まじかよ、蒼の足がもう動かないとか、そんなことあっていいのかよ。ずっとがんばってたのに、あいつ、まだ十一才の小5なんだぞ。こんなことって残酷すぎるだろ。そんなことしか考えられなかった。おう、まかせるとかもいえなかった。

俺と蒼は、兄弟そろって陸上をしていた。2人でいつかオリンピックにでて、2人でメダルとろうって、それを目標にして、2人でがんばっていた。蒼が走れなかったら、俺の走る意味ねーじゃん。とか思ってたから、練習で走ってる時、コーチに呼ばれた。

「優、おまえ走りに集中できてないぞ。蒼のことは分かるが、あいつの分もがんばれよ。」

何ががんばれよだ。俺の気持ちもしらねーくせに。とか思っちゃった。なんか俺、やなやつだな。

目標を見失った俺は、陸上を何のためにやるのか分からなくなって、練習にいかなくなった。同じチームの友達が家に来て心配そうに理由をきいてきたが、俺は、

「んーちよつとチョーシ悪いから、ちよつと様子見ていこうかなって。」

と、うそをついた。本当は、ただ弟が走れないのに走っていいのかわからなくなつたから。いや、それもそではないけど、ただのいいわけ。

本当は、弟が走れないのをいいわけに、ただ自分の中に走りたいっていう意志がなくて、弟のためにしか走れなかったことを認めたくなかっただけ。

次の日、学校に行くと、同じ陸上チームの涼太に呼び出された。

「なあ、優。おまえ、なんでこないんだよ。」

「だから、チョーシが悪いんだって。」

「昨日、蒼君の所に行つて話聞いてきたんだ。そしたらお兄ちゃんががんばってますかっていつてたんだぞ。」

「だったら何だよ。」

「とにかく！今日は、蒼君がいたいことがあるらしいからお見舞いにいけよ！」

というと涼太は教室にもどっていった。

「なんだったんだ。なにいいたいのか分かんねーし。」

その日、病院に行くと蒼が突然言った。

「お兄ちゃん！僕、また走れるよ！」

「は？どうして。」

「お医者さんに僕ね、どうしてもあきらめたくないっていったの。そして、車いすがつかえるようになれば、パラリンピックにもでれるかも

だって。」

「そうか、よかったな。俺もがんばるよ。実はな、兄ちゃんなんで走りたいか分かってなかったんだ。でも蒼のおかげで分かったよ。」

弟のためにしか走れないじゃない。弟のために走る。それが俺の走る理由。人のために走るのも悪くない。

窓の外では鳥が2羽、まるで速さを競い合うかのように飛んでいた。

